



キオラ！ワイロア～私たちは同郷だ～ 北茨城市とニュージーランド・ワイロア地区の交流

北茨城市国際交流協会 会長 明石俊憲 北茨城市まちづくり協働課 主幹 松川記壽

交流のはじまり

北茨城市とニュージーランド・ワイロア地区との交流は、1994年に北茨城市国際交流協会（以下、「協会」という。）が発足したことにより始まりました。

北茨城市では、将来を担う子どもたちが海外でのホームステイを通じ、言葉も食事も文化も違う生活を経験することで、「国際交流に強い人材をつくりたい」との想いを胸に、協会を通じて相手の国・地域を探し始めました。

まず、協会は子どもたちを派遣する時期はいつが良いかを検討し、春休みとしました。北茨城市の春休みは約2週間、気候はようやく暖かくなり始める季節です。そして、海外へ行くのであれば、この時期に暖かい地域が良いという結論に至り、日本とは気候が逆さまとなる南半球に地域を絞りました。

南半球といえば南米、アフリカ、オセアニア地域などがありますが、協会では移動距離・時間を考慮して、オセアニア地域のニュージーランド国を交流希望国として選定、ニュージーランド政府観光局を訪問して、北茨城市の概要・情報・交流希望内容を伝えました。そして、国際交流を行うにはどの自治体が良いか、候補地を推薦してほしいと依頼したところ、ニュージーランド大使館より南島のウェストポート地区と、北島のワイロア地区を推薦していただきました。

この推薦を受け、協会より両地区へ高校生のホームステイ受入を打診する文書を送付したところ、ワイロア地区から即座に「承諾する」との返信をいただいたことから、北茨城市との協議の上で、ワイロア地区との交流を進めることが決まったのです。

北茨城市若人親善大使派遣事業 (通称 ^{キャップ} KYAP)

本事業は、ワイロア地区での日程・活動内容調整、派遣者の募集・決定、7回の事前の研修会などを駆け足で

行い、1995年3月、記念すべき第1回目の事業として、10名の高校生をワイロア地区へ派遣することができました。



現地では、ラジオ ワイロアカレッジ訪問の様子出演、新聞取材、市長表敬訪問、ワイロアカレッジ訪問、ホームステイ、日常生活体験などさまざまな活動を行い、7日間にわたる派遣事業を無事成功させることができました。

帰国後、ワイロア地区の人々の温かい人柄を肌で感じた高校生達が、「今後の北茨城市とワイロア地区の関係も、次回以降の派遣も必ず上手くいく。」と言ってくれたことは、協会への最高のお土産となりました。

以降、1999年までの5年間で5回、計50名を派遣し、両市地区相互に文化、人間性を十分に理解することができたことから、1999年5月、ワイロア市よりデレック・フォックス市長と、レズ・プロバート副市長が来日し、ニュージーランド大使館からはレニス・カラン書記官が立ち会いのもと、北茨城市にて「国際親善友好都市」を締結することができました。

このようにして協会の目玉事業となった北茨城市若人親善大使派遣事業では、2015年3月までに17回、計161名の中高生と50名の市民がワイロアの地を訪れました。

ワイロアカレッジ高校生受入事業

一方、ワイロア地区からの受入事業としては、ワイロアカレッジ高校から生徒受入を、1997年よりワイロアプロジェクトと称して実施し、以降隔年で2009年までに7回、計113人の高校生と27名の市民が北茨城市を訪れました。

2011年9月には8回目の受入を予定していましたが、東日本大震災の影響により延期となり、以降受入事業は

残念ながら延期となっていました。

スカイプ国際交流事業

そして、協会が今一番力を入れている事業は、スカイプ国際交流事業です。この事業では、北茨城市の小学生とワイロア地区の小学生がインターネット電話スカイプを通じてリアルタイムで交流を行います。“小学生のうちから海外や英語を身近に感じてほしい”との想いから、2013年9月より、5校7クラスで実施しました。

ワイロア地区との日程・学校調整や、スカイプの接続支援などを協会が行いますが、会話中の交流は全て小学生がアイディアを出し合い、実施しています。これまでに桃太郎の劇、習字、箸の使い方、剣道、ゆるキャラなど、小学生目線で選んだ日本文化を、練習した英語で紹介することで、交流を進めました。

本事業は、参加した小学生や先生方にも好評で、ほかの学校からも実施を要望する声が多い。スカイプ国際交流事業（桃太郎劇の説明）ものの、学校行事やカリキュラムとの調整、インターネット接続環境など解決が必要な問題も多いため、実施する頻度を急には高めることができませんが、工夫して少しずつ問題を解決し、年々実施回数を増やせるように取り組んでいます。



スカイプを行った児童の中には、「中学生になったら交流した相手に会うためワイロアへ行きたい。」と口にする者も多く、協会が当初より目指した“国際交流に強い人材の育成”に向けて、小学校でスカイプ交流を行い、中学校・高等学校で北茨城若人親善大使派遣事業へ参加し、その後国際交流に関わる大学の学科で学ぶことで、国際感覚が養われた社会人へのルートが完成しつつあるのかもしれない。

事実、若人親善大使として派遣された生徒の中から3名は、その後ワイロアカレッジ高校への留学が実現し、そしてまた別の1名は青年海外協力隊の一員として、現在、カンボジアにて看護師として働いているのです。

震災後の交流の継続

先日、当市と協会にとって非常にうれしいニュースが

ワイロア地区から飛び込んできました。それは2011年以降、実施を延期してきたワイロアプロジェクトへの派遣再開がいに決まったという一報でした。



ワイロアプロジェクトにおける稲刈り体験

東日本大震災以降、北茨城市は震災からの復興途上にある状況においても継続して交流事業を実施してきました。

2013年3月より北茨城市若人親善大使派遣事業を再開、そして、同年10月に職員を相互に派遣し合いました。2014年には北茨城市国際交流協会設立20周年記念・国際親善友好都市締結15周年を迎えるため、9月にワイロアカレッジ高校よりトレバー教授一行をお招きして、記念事業を実施、翌2015年2月には、就任されたばかりのワイロア市長を表敬するため、北茨城市副市長がワイロア地区を訪れ、3月には若人親善大使も派遣しました。

この一連の事業により、ワイロア地区から北茨城市を訪れた4名には、震災後の北茨城市が安全な町であることを体感し、そして、北茨城市からワイロア地区へ訪れた30名と共に、震災による風評被害を取り除く努力をしていただきました。

こうした相互往来による取り組みの積み重ねにより、北茨城市が安全で安心できる町であることをワイロア地区を多くの人に知っていただくことで、延期していたワイロアカレッジ高校生受入事業の再開が実現したのだと思います。ワイロアプロジェクトに参加し、多くの高校生が2016年9月に来日されることが待ち遠しく感じられます。

最後に

「キオラ！」とはマオリ語で「こんにちは！」という意味です。そして、ワイロア地区の人々の性格が実直で、誠実であることから、日本人として共感する点が多く、親切的なワイロア地区の人々と会うたびに、「もともとは同じ民族であったのではないか。」と感ずることから、副題を「～私たちは同郷だ～」とさせていただきます。

今後とも北茨城市とワイロア地区の交流が一層深まるよう、取り組んでいく所存です。